

(一社) 東洋音楽学会 西日本支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第87号 (2018年3月23日)

定例研究会のご案内

次回、第 279 回定例研究会の日時や内容等は未定です。決まりましたらあらためてご案内を差し上げます。

* * * * *

定例研究会の記録

東洋音楽学会西日本支部 第 277 回定例研究会

日 時 : 2017 年 9 月 30 日 (土) 13:30~16:30

場 所 : 京都教育大学 音楽演奏室

○博士論文発表

1. 北東カンボジア山地民クルンの音響的参与の民族誌—気分と精霊
井上 航 (京都市立芸術大学)

〈要旨〉

博士論文は、山地・丘陵地で焼畑稲作を営むエスニック・マイノリティであるクルンの人々の村落での 2 年あまりの参与観察調査にもとづ

く民族音楽学・文化人類学的研究である。報告は、口頭発表であることを考慮して博士論文の動機・テーマ・枠組みにふれ、主要な具体事例を紹介・考察することに絞った。

動機については、民族誌的研究において体験的な描写・記述を推進するという問題意識があった。民族音楽学・文化人類学で身体的重要性がつとに指摘されるなか、「身体でわかること」を中心にすえる枠組みが活発に議論されるべきだと捉え、自分なりの生産的なテーマと枠組みの提示を博士論文の主眼とした。具体事例とつきあわせてテーマとなったのが「気分」である。そこには三つの要因がある。①全般的にクルンの人々が気分にしたがうことを倫理的な行動原則のように捉えているとみえた。②霊的なものの存在論が気分と密接に関係しているとみえた。③音楽的行為においても気分が大きな意味をもっているとみえた。博士論文は、これら三つがそれぞれ確かにそう言えそうだと示すこと、そして、三つが互いに関連していることを示し、気分という問題の論じられてこなかった重要性を示すことに取り組んだ。

枠組みは、現象学的方法による間主観的体験記述の民族誌のそれを踏襲しつつ、参与 **participation** の概念とその実践を中心とする独自の構えをつくった。これも三点に要約できる。①参与観察の参与に重心をおく研究者の姿勢。②研究対象は先方の人々どうしの参与の営み（日常行動も音楽も）。以上二点は、研究者が先方の参与状況に参与することで、先方にとっての参与（ともにあること）の意味の内在的理解を得ようとするものである。その土台として、③**participation** 概念の再提起。「参加・関与」という能動的行為でありつつ「様子を帯びる」という実現された様態をも意味しうる点に注目した（辞書の語義に見えるほか、C・カイルらが「様子を帯びる」という意味合い抜きにありえない参与に深く言及している例がある）。つまり、先方の営みに参加・関与しているなかで、先方の帯びている様子を研究者もいくばくかは帯びる可能性を追究し、内省的に記述に反映することを目指した枠組みである。これにより、気分というつかみづらいプロセスの言語化をもくろんだ。

本報告では具体事例として水牛または牛の供犠にともなうゴングの合奏を取り上げた（論文本体に添付提出した映像の一部も上映）。合奏

は、ピッチの異なる5台のゴングを1人1台うけもち、5人がかりで特定のパターンを打つもので、牛や水牛の捧げられる精霊を楽しませるためと言われ、二日がかりの儀礼で打奏すべき複数の局面が定められている。「楽しませる」というときの「楽しい」の内実がどのようなものであるかが問題であり、ある儀礼を例に局面ごとの参与の様態（どのような様子を帯びるか）に言及した。ある人の畑の精霊が怒ったため、それをなだめるためにその畑でとり行われた牛の供犠である。接する対象が生きた牛である局面と、接する対象が解体調理された肉や酒である局面では、会衆が同じ面々であっても、相手にしているモノや作業リズムや作業音、話し声など、参与の状況をなす様態が大きく異なり、ダイナミックな気分の変化が生じていることを指摘した。音構成としては同じパターンの打奏であっても、気分の変化を反映して演奏姿勢や取り巻く人々の様子や響きそのものの様態が大きく変わり、その変化が精霊に捧げられる「楽しさ」の質を決めていると考えられる。最終局面では定まった儀礼手続きのなかで精霊に向けた打奏であることの半ば自覚的、半ば無自覚的な確認がなされる。その時点のゴングの音を帯びた会衆が「楽しい」とも、同様に音を帯びている畑という場所が「楽しい」とも記述できるが、このように言葉の構成の仕方しだいで文として意味の焦点が異なりうるにせよ、リアルタイムの出来事を体験する主観にとっては、わざわざそうした言語的意識を持たない限りその区別は問題にならないはずである。それでも確かにあると言えるのは身体的実感としての気分であり、精霊も場に参与していると考えられている限りにおいて、求められる気分を場が全体的に帯びるといふ参与の様態ないしパフォーマンスこそが重要なのだと考えられる。こうした気分の重要性の考察から、儀礼とそこでのゴングの意義や、精霊の存在論とのかかわりにも言及した。

〈報告〉

本発表は井上氏が2017年3月に京都市立芸術大学大学院に提出した博士論文に基づくものであった。博士論文自体は7章からなるが、発表では論文における議論の核である3章から5章を扱った。

発表者は、「感覚」の記述は可能かという初源的な関心を軸に、フィ

ールドの対象となった山地民クルンの供儀における霊的なものや心との向き合いかたを、彼らの生活に散在する「気分」や発表者自身がフィールドにおいて感じ取った「感触」を民族誌的に記述する形で論文にまとめあげたと言えるだろう。

間主観的な構えをとりつつ、主観を排除しないところに研究の特色はあるといえるが、「出来事の文脈を探ること」を「(その場の) 気分を探ること」と捉え、客観的な記述や出来事の解釈ではない「感触 feeling」や「気分 mood/Stimmung」を記述するという発表者の方法論は、客観的な記述によって「理解」することでは踏み込めない領域（語り得ないもの（霊性）との関わり方や心性）を扱ったという意味で興味深いものであった。ただ、その場の感触や気分を、「主観」をもって記述する際には、どうしても調査者の「誤読」の可能性がつきまとうことは否めない。実際、フロアからは現地の言葉ではどのように表現されているのかというような質問もあったが、発表者は翻訳・言語化の可能／不可能性の問題を考慮しつつ、供儀の場における詠唱を今後の課題としたい旨の応答がなされた。

発表そのものは、方法論の説明が中心であったため、対象の様態についての説明に多少の物足りなさが残ったのは致し方ないが、現象学的な見地にも触れながら慎重に研究の立脚点を確認する作業を進めたことは評価されなければならないだろう。いずれ別の機会により詳細な発表に触れる機会を待ちたい。

触るものと触れるものとの両方に生じる「feel (感じるということ)」(ベイトソン) は対象と己の感覚との「あいだ」に不可分にあるものである。それゆえに言語化は難しい。だが、その言語化の困難な「間性」の領域にあえて踏み込んだ意欲的な研究(と思われる発表者の博士論文全体) がいずれ公刊されることを望みたい。(竹内 直 記)

2. ジョージア（グルジア）の民族的文化遺産としての合唱「ポリフォニー」—20世紀の民俗音楽研究と文化政策を中心に

久岡 加枝（大阪大学）

〈要旨〉

博士論文の第一章では、作曲家アラキシユヴィリの民謡研究(1905)から、西ジョージアの男声合唱に「文化的真正性」が見出された事実を明らかにした。彼の価値観はソ連期以降のジョージアの知識人の間にも共有され、1930年代のジョージアでは、「エスノグラフィー合唱団」と呼ばれる西部出身者からなる男声合唱団が民族文化を普及する上で活躍した。

第二章では、1930年代末の音楽学者によってジョージアの民族音楽「ポリフォニー」に、太古からの歴史的正当性を裏付ける語りが生み出された過程を明らかにした。第三章では、民俗楽器オーケストラの位置づけについて考察を行った。第四章では、「アマチュア芸能活動」と呼ばれるソ連全域で推進された音楽愛好家の活動について考察を行った。ソ連期にこの活動に参加した者の中には、1980年代末の伝統復興にかかわるケースもみられた。

第五章では、アマチュア芸能活動で歌われることもあった民謡編曲作品における、文化的「周縁」の表象について、ムシュヴェリゼの『プシャウリ』(1934)の分析から明らかにした。第六章では、1950年代末の民謡研究で、儀礼歌等の旋律の発生を民族の起源と結びつける見解が生じたことを明らかにした。

第七章では、アブハジアのハシュバの研究(1967)から、アブハジアとジョージアの音楽文化を同族視するトビリシ音楽院の見解に反証する見解が生じたことを明らかにした。

第八章では、トルコの影響を受けた南西部において、現存する民族文化の基層となる旋律を基に合唱の復元が進んだことを明らかにした。

第九章では1980年代以降のトビリシ音楽院の学生の間で生じた伝統復興に焦点を当てた。第十章では、ポストソ連期の大衆歌謡の状況について考察した。

〈報告〉

久岡氏の発表は、ジョージアの民族を代表する伝統音楽である男性合唱「ポリフォニー」に20世紀の民謡研究や文化政策を通して文化的な

「真正性価値」が裏付けられてきた歴史的過程を文献調査から明らかにした博士論文の概要発表となった。この「真正性価値」はポリフォニーがユネスコの世界無形文化遺産に登録されるプロセスにおいても重要な要素となったものである。

代表的な先行研究として Tsitsishvili N. による国家統合とジェンダーのイデオロギーに関する文献資料(2010)が紹介された。ここでは家父長制社会における男性合唱ポリフォニーの重要性、ポリフォニーと儀礼との関連などが強調されているが、久岡氏はこれに対して、ジョージアの他地域の豊富な音楽文化の存在を考慮した上で合唱のみが代表的な民族文化とされてきたプロセスに疑義を提示した。そして、D.アラキシシュリ(1873-1953)による民謡研究(1905,1908)、G.チュヒクヴァゼ(1900-1986)による音楽史の研究(1939,1940)などを通して、ソ連期を通して男性合唱ポリフォニーが文化的権威を高め民族文化として成立していった道筋を分析し、そのプロセスにおいて重要な役割を果たしたアマチュア芸能活動についても検討を加えた。さらにその後の時代における Sh.アスラニシュヴィリ(1896-1981)の民謡研究(1954,1956)による民族の音楽文化の基層となる旋律の発見について、またアブハジアの音楽学者ハシュバ(1938-1967)の研究による北コーカサスの音楽文化の位置づけについても考察を行った。そして、20世紀中頃に多声的合唱の復元を行った V.マクラゼ(1923-1989)の活動、また1980年代以降の伝統復興運動に大きな影響を与えた歌手で民謡研究者の E.ガラカニゼ(1957-1998)の活動を分析した。最後に、ポストソ連時代の新しい民謡の動きとして、アコーディオン演奏をフィーチャーした女性歌手 L.タタライゼの活動を取り上げ、男性合唱へのカウンターカルチャーとして位置づけた。

全10章からなる壮大な博士論文の概要発表を通して、伝統の創造、文化の正統性をめぐる価値、文化遺産登録への動き、などの興味深い問題が提示された。

質疑応答では、国名の変化やソ連との関係などの質問が投げかけられた。それらの質問に対する回答を通して、ロシアに支配された歴史的プロセスの中で、文化的にはロシアへの共感を持ちつつも政治的には反発

していったこの地域の矛盾的な経緯が提示された。1991年にソ連から独立しロシア語読みのグルジアから2015年にジョージアと改名された経緯なども含めて、この地域独自の文化政治の背景が説明された。

(福岡 まどか 記)

○研究発表 (ワークショップ付き)

3. ポリリズムが生み出すグルーブと身体的律動に関する考察

—カメルーン都市部におけるヒップホップ・カルチャーの発生現場

矢野原 佑史 (京都大学)

〈報告〉

本発表はカメルーン都市部における若者達のヒップホップ・カルチャーを取り扱ったもので、氏の研究履歴を辿りつつ発表が進められていった。まず、ヒップホップとの出会い、レゲエを通じてアフリカに関心を持ちはじめたこと、鈴木裕之『ストリートの歌』に触発されてアフリカ音楽の研究を志したことが述べられた。その後、氏は大学院に進学してカメルーンでバカ・ピグミー音楽の調査を試みるが、調査を終えて戻ってきたカメルーン的首都で出会ったのが、アメリカのヒップホップを聴く若者達であった。これがきっかけとなって、(いわゆる)民族音楽に合わせて現代アフリカ音楽も視野に入れた総合的な「アフリカ音楽」研究に着手する。

続いてカメルーンでのヒップホップ・カルチャーの報告が行われた。渡航は4回に及び、調査方法は、現地に暮らし、当地の人々の生活の場に溶け込んで、ともに作り手達と音楽活動を試みるという共創的アプローチである。まず、カメルーンにおけるヒップホップの概要に関して、マジョリティのフランコフォン(仏語話者)とマイノリティのアングロフォン(英語話者)の音楽実践を軸に近年の状況が紹介された。また、ヒップホップの製作過程も詳述された。ヒップホップはスタジオで製作されるのだが、氏の所有するコンピュータとマイクロフォンに引き寄せられるように作り手達が氏の部屋に集まって、徐々に生活空間がスタジオに変容していったらしい。仲間が集まって次々にアイデアが提案さ

れ、音と言葉が構成されて楽曲が誕生する。たまたま訪ねてきた友人のアイデアが加わることすらある。22 分で流れるように楽曲が完成した事例が紹介され、「ノリ」を大切に即興的に創作される様子が報告された。

発表は山田陽一『響きあう身体——音楽・グローヴ・身体』からグローヴについての学説を引きつつ開かれた状態で終わり、続いてワークショップが始まった。全員で様々なリズムパターンを演奏した、気が付いたら体が揺れているという状態にはかなりの距離があったものの、所作を通じて音楽する身体を考える良い機会になった。

質疑応答ではカメルーンにおけるコンピュータの普及以前のヒップホップの製作状況が問われ、ターンテーブル、サンプラー等を使用して製作していた昔の様子が示された。

(上野 正章 記)

東洋音楽学会西日本支部 第 278 回定例研究会

日 時：2017 年 11 月 18 日 (土) 14:30～

場 所：大阪大学吹田キャンパス人間科学研究科 東館 404 号室

《タイ王国北部、ランナー伝統芸能のいま》

〈報告〉

1. 「はじめに—ランナー王国と伝統芸能」

馬場 雄司 (京都文教大学総合社会学部 教授)

例会にさきだって馬場雄司氏より、北タイの音楽に関する歴史的・地理的な状況についての概説があった。北部タイ地域は水稻耕作や上座仏教(一部ヒンドゥー教)などを特徴とする盆地小国家として文化的な発展を遂げてきた。中部タイとは異なる独自の文化圏として位置づけられ、1930 年代まではチェンマイを中心として王国文化を築いてきた伝統のある地域である。また、ビルマのシャン州、ラオスのルアンパバーン、などの周辺地域を含む広い文化圏をランナー文化圏として位置づけ

ることができる。

ラーナー音楽は、宮廷レベルのもの、寺院レベルのもの、村落レベルのもの3つに分けられる。

現在の北タイの伝統音楽として、撥弦楽器、コキュウ、笛、鐘、タイコなどを用いるアンサンブルの特徴や掛け合いの歌の伝統などが紹介された。また中部タイとの関連で発展した楽団や武術舞踊、爪踊り、刀の踊りなどの実例も紹介された。

また平野部だけでなく、モンやラフなどとして知られる山地民の独自の音楽文化があることも紹介された。

(福岡 まどか 記)

2. 「Transformation of Lanna Traditional Music from the Past to Present Time」

Thitipol Kanteewong (総合研究大学院大学/Faculty of Fine Arts, Chiang Mai University, Thailand.)

チェンマイ大学にて教鞭をとるティティポン・ガンティウオン氏は、楽団チャーンストンを主宰し、伝統音楽の継承と伝統を創造的に革新するネオ・ラーナー・ミュージックの振興を担ってきた音楽家である。本発表は、20世紀から現在までのタイ北部における伝統音楽の変化について、どのように音楽文化が継承され、また伝統音楽がネオ・ラーナー・ミュージックとして展開してきたのかを分析するものである。

氏は、まずラーナーの伝統音楽を、社会や宗教とのかかわりにもとづき、家—民俗音楽 (Folk music)、寺院—伝統音楽 (Traditional music)、宮廷—古典音楽 (Court / Classical music) の3つのレベルに区別し、それぞれの音楽が近代化やグローバル化の影響を受けてどのように変化してきたのかを考察する。

ラーナーの芸術文化の大きな変化は19世紀末のダーラーラッサミー王女 (チェンマイ王家出身、ラーマ5世の側室) による中央タイやビルマの音楽や踊りの受容に始まった。1932年の立憲革命を経てラーナー王朝がタイ王国に統合された後、伝統音楽はリージョナリズム、ナ

シヨナリズム、インターナシヨナリズムの影響を受ける。ベトナム戦争期、欧米のフォーク・ミュージックは北部方言によって歌い替えられ全国で流行した。ギターやドラムといった楽器は理論とは関係なく伝統楽団に取り入れられた。他にも、伝統音楽をポップス化したルクトゥンや、方言で歌うポピュラーソングも流行した。近年は、方言でヒップホップを歌うジャンルもある。21世紀に至ると実験音楽がラーンナー伝統音楽に影響を与えた。西洋楽器と伝統楽器の混合楽団の登場、音響機器の補助による音の小さなピンピア（撥弦楽器）のアンサンブル、伝統楽団による新曲の創作、そしてチャーンサトン楽団のような多様な民族楽器を取り入れた音楽が生まれた。このようにラーンナーの音楽文化は、近代化やグローバル化のなかで、常に様々な外的影響を柔軟に取り入れて創造を繰り返してきたのである。

チャーンサトン楽団は活動開始当初、伝統文化の破壊と厳しく批判されたという。発表では詳しく述べられなかったが、氏の楽団は単に目新しさから民族楽器の混合編成や演奏技法の創出、作曲を行ってきたのではない。ラーンナー文化をとりまく社会状況や、上座仏教の世界観、そして生活文化のコンセプトを音楽表現に取り入れて作品を生み出してきた。現在ではチャーンサトン楽団につづくグループが多く生まれており、また様々な伝統芸術のジャンルが伝統文化を世界と柔軟に交渉させるネオ・ラーンナー文化を展開させている。

(伊藤 悟 記)

3. 「タイ王国チェンマイ県の歌師チャンソーの取り組み—即興歌謡ソ—の学習と教授方法を中心に」

伊藤 悟 (京都文教大学)

伊藤氏は、掛け合い歌チャンソーの伝承について発表された。チャンソーはビーと呼ばれる笛、コキュウ、撥弦楽器などを用いる男女の掛け合い歌である。王国時代には王家のパトロンが見られたが、革命後は民俗芸能への変化を遂げていったジャンルとして位置づけられる。チェンマイのチャンソーは洗練された様式として知られ、他地域においても人

気を得ていることもあり、現在では民俗芸能から芸術としての位置づけが指向されており、上演の規範化が見られる点も指摘された。現在のチャンソーの上演は歌だけでなく身振りなども伴うものであることが特徴となっている。昔は声量が重視されていたが1970年代くらいからはマイクを使用し、1980年代になるとバックダンサーなども登場するようになり、マイクを持って外で身振りを交えて歌う場合もあり、伴奏にキーボードを加えるなどの多様な変化も見られる。チャンソーの担い手は50代から60代の世代が多く見られるが、40代より若い世代の育成も見られる。

パフォーマンスの伝承プロセスは師匠から弟子へと伝えられる。伊藤氏はこの伝承プロセスに注目して考察を行った。まず、特徴としては伝承の中では規範的な型が示されることはなく、即興で展開されるわざ自体を体得し学習していくというやり方である。また以前は住み込みの弟子入りが行われたが、現在では独学で体得したものを師匠に見てもらおうという方式が一般的である。明確な規範をもたない伝承の方法は歴史的に見られたものであると推測され、そこでは師匠による歌の展開の「道筋」を習得することが重要であった。一方で今日は録音や録画のメディアなどを用いた練習を行う弟子も増えており、師匠のわざをそのままなぞる習得も行われており、伝承のやり方にも変化が見られる。

重要なことはチャンソーの歌い手になるためには、技術のみではない、歌い手としての人格の形成が重視されることである。上演の中では聴衆との駆け引きなどが重要であり、またチャンソーの歌い手は詩を繰り出していく頭の良く機転が利く存在と見なされており、そうしたやり取りや即興性も含めたわざの習得が重視される。

伊藤氏は、弟子が独立する際の儀礼であるリヤンク儀礼を例に挙げて、そこで人々が多様なわざを用いて交流し合い、普段の上演では見られないような演奏方法などを披露し合う状況を考察し、上演の柔軟性や人間関係を重視するチャンソーの歌い手独自の人格形成のプロセスを紹介した。

(福岡 まどか 記)

4. コメント

最後に馬場氏からティティポン氏と伊藤氏の発表に対するコメントが提示された。

第1点目は、中部タイをはじめとする多様な芸術伝統が融合されていき、また外部世界からの影響を受けた新たな音楽文化の創造が行われる状況の中で、ランナー音楽と呼ぶためには何か重要なのか、ランナー音楽独自の特徴は何なのか、について考察する重要性である。これはランナー地域と周辺の他地域との違いなどについて比較してみることの重要性とも関わっている。これについては調性やテンポや言語の違いが顕著であるという音楽的特徴に加えて、人々がともに音楽を楽しむ機会が多いことなどランナー地域の文化的独自性が発表者より示された。

また第2点は、現在の音楽の姿の考察を通して、あるいは歴史的な資料の検討などを通してダーラーラッサミーの時代(20世紀以前)のランナー音楽の伝統の姿を探求することの必要性である。これについては発表者から北タイの音楽の歴史的研究の必要性が言及されるとともに歴史的資料の検討の難しさも指摘された。

フロアからは、楽器名やジャンル名などについての基本的な質問に加えて、チャンソーなどの音楽が本来持っていた社会的な機能などに関する質問が出された。

(福岡 まどか 記)

* * * * *

■入会申し込み・住所変更について

(一社) 東洋音楽学会への入会をご希望の方は、82円切手を同封し、下記の学会事務所へ入会案内・申込用紙をご請求ください。申込用紙は、ホームページからもダウンロードできます。会員の異動や住所変更等についても、下記の学会事務所へお知らせください。申し出先は支部事務局ではありませんのでご注意ください!

一般社団法人 東洋音楽学会 学会事務所

〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307号室

TEL 03-3832-5152, FAX 03-3832-5152

ホームページ <http://tog.a.la9.jp/>

■研究発表の募集

西日本支部定例研究会での研究発表を希望される方は、発表種別（研究発表・報告等）、発表題目、要旨（800字以内）、氏名、所属機関、連絡先（住所、電話、FAX、E-mail）を明記の上、下記の西日本支部事務局までお申し込みください。

東洋音楽学会 西日本支部事務局

〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町 13-6

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 藤田研究室気付

TEL 075-334-2392, E-mail tfujita@kcua.ac.jp

支部だより 第87号

発行：東洋音楽学会 西日本支部 担当：武内 恵美子、出口 実紀

〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町 13-6

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 藤田研究室気付

TEL 075-334-2392, E-mail tfujita@kcua.ac.jp